

特集

女医は医療を 救えるか？

60

特集

2010年 話題の新薬

83

トレンドビュー

花粉症治療で見直される鼻噴霧薬 20

重度の尿失禁に人工尿道括約筋 24

地域医療再生基金、医療現場を翻弄 34

スペシャルレポート

岐路に立つ大学病院総合診療科 37

ニュース追跡

医療施策を巡り民主党で“内紛” 50

ヒーローの肖像

鄭忠和 慢性心不全に対する温熱療法を確立 165

Nikkei
日経メディカル

<http://medical.nikkeibp.co.jp>

Medical

1

January 2010

2010年1月10日発行
(毎月1回10日発行) 第506号

メスも人生も捨てない





男性医師も育児休業を取得する時代に

島根大医学部附属病院では、2009年7月から1カ月間、放射線治療科の男性医師が育児休業を取得した。14歳の長女、7歳の次女、2歳の三女を持つこの医師は、4人目の長男の誕生に際し、自然と「育休を取ろう」と考えたという。

がん放射線治療教育学教授で女性スタッフ支援室の副室長も務める内田伸恵氏は、「以前は育休などとは言い出せない雰囲気があったが、今は違う。男性医師から相談を受けて当科のメンバーで相談した結果、『取ればいいじゃないか』ということになった」と話す。

同科では元々、病棟でも外来でも1人の患者を2人の医師が担当する複数主治医制を取っている。男性医師の育休中

は、ほかの医師が少しずつ勤務や当直、オンコールを増やして対応した。

現在、島根大医学部の入学者の約半数(09年度は47%)は女性で、病院における女性医師の割合も増えている。看護師を確保するという点からも、同病院は女性に働きやすい勤務環境づくりに力を注いできた。

06年には院内保育所を開所。07年度には文部科学省の「地域医療等社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」に採択され、育児支援や在宅教育・勤労支援、復帰支援などを進める。育児中、常勤のまま短時間勤務をする医師や、育休から復帰する医師も増えてきたほか、病理医や放射線医の中に



島根大医学部附属病院の内田伸恵氏。2人の子供を育てながら医師を続けてきた経験を生かし、取り組みを進める。

は、育児をしながら在宅でCTのレポートを作成する医師もいる。

こうした取り組みが、男性医師にも育休を取ろうと思わせる空気を醸成しつつあるようだ。内田氏は「最終的に、こうした勤務環境が、医師や看護師を集めるアピールポイントになることを期待している」と話す。